

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	岡倉天心の「万国歴史」講義（下）
Author(s)	吉田, 千鶴子
Citation	五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要(14): 21-45
Issue Date	2007-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10109/535
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

【資料紹介】

岡倉天心の「万国歴史」講義（下）

吉田千鶴子

サラミスの大海戦

希臘はペルシヤ陸軍に当るの陸軍なく、老若男女は皆山中に逃れ、壯者は皆舟に乗りてサラミス海湾に退きたり。此湾に希臘の海軍は悉く此所に集まりしが、其過半はアゼンスの兵なり。是れ以前よりアゼンスの国是としたる結果なり。併し、従来兵事に付てはスパルタが希臘諸邦中常に主位を占めし故に、海に於ても亦スパルタ軍人に帰するに決せり。此時も矢張りスパルタ大將ユーリピアデスにて尚スパルタの眼中にはアゼンスなかりし故に、此総軍を率ひてコリンス海峡に出て、ペルシヤ軍を待たんとせり。之れスパルタ人此地に城塞を築きしを以てなり。セミストクリーズ大將ユーリピアデスに説き、辛ふじてサラミスに戦ふ事に決せり。此人は譎策多き人にして、此時海陸応援の策を採りし。此は即例の譎策を以てし、波斯軍に使を遣はして曰く、我軍スパルタに与するを欲せず、今夜退去すべし。因て貴軍其虚に乗じてスパルタ軍を要撃すべしとてスパルタ人を抑留せしめし。ペルシヤ王之を事実なりと信じたり。而して此方にては之を防ぐ策をせし。此備を立なほすとき非常に多くの舟ありて、此舟のヘサキに矢兵の如きありて、之を舟の横に行けばすぐに突き破る如き風に作らして、種々の風ありしが、之をガリーとて、之を漕ぐには此穴より權を出して之を奴隸にこがしめし。此奴隸は常に船底にありて之を漕ぐ仕事なせり。奴隸は之を嫌ひ逃ぐる故に、腰辺より繩を以て結び付けし。此くして向ふの船に飛び入りて切りこむなり。而して之を突くときに甘く当れば中々抜けず。其形は此の如きものにて、此船の穴の多くある程強艦なりし。

此くペルシヤの軍を立なほす間に攻撃して非常に騒動のとき火を



以てペルシヤの海軍を焼き打せし。而してペルシヤの海軍は全く敗亡せし。此くして後に残軍を永く讀へたり。

其處で此功を奏せしは皆アゼンスなり。此くしてアゼンスの勢力は大に揚り、尚又此武威を揚げしが、之よりアゼンスとスパルタの競争起りて、スパルタがアゼンスを嫉み出せし。此ときアゼンスの国策たる、希臘は國小にして且海に沿す故に防国の策海軍にありとの策を取りたり。之がサラミス等の乱の後なれば大に勢力を得て、此が十中七八の他種族は一致せし。之を以てアゼンスを海軍の中軸となし、大船と小船の数の規定を定め、之に糧食と舟乗とを定めし。然るに或は大海を見ざるものもありて舟も知らず、之を堪へざるを以てアゼンスに国防費として舟と人との□を払ふ様にしてたり。後にアゼンス近傍に造船所を作りて盛に舟を作りて兵を練りし故に、希臘の勢力は自然とアゼンスに落ち、アゼンスは己の国土を兵庫としたり。故に大に海軍の勢力を増せり。此期に乗じアゼンスを盟主となさんとて、多くの政治家中ペリクリースが最雄物にして、此人、実に此を唱へ出せし。

此くペリクリーズ、アゼンスの政權を握りて盛んに経綸を行ふや、アゼンスの隆昌其の絶頂に達し、文化赫々遠近に輝く。其余光を後世に垂る、も亦少なしとせず。是即ち当時ペリクリーズ時代の称ある所以なり。ペリクリーズの国政を行ふや、民權を拡張し、貴族の勢力を排斥し、人民の自由を國務に参務するを赦し、当時の最強國となり、国力の隆昌を極めたるのみならず、人智の發達頗る驚くべきものあり。此時文学技芸は実に美妙円満の境に達したり。

此頃の争は、勿論大砲もなく、弓矢をかりたれど、つまり固き城が

上乘なりし。此ときアゼンスに之なし。此際に当りアゼンスが強砦を作ること尤も必要なり。此ときに乗じて其周圍に城壁を立て始めし。

然しアゼンスが此城壁を作るに付てスパルタは大に攻撃したり。十二種属又甚しく之を推しし。而るにスパルタに使をやりて、作りては居ないとして、時々能弁家をやりて説かしめし。又、彼より来るときは種々の面白きことをして使を永くやらざりし。之が漸次注心〔注進か〕に來りてアゼンスは矢張廓を作ると告ぐ。故にスパルタより使を出せば、此使を出来る丈長く中途に留めて其成功を早めし。而して此ときアゼンスは男女小□悉く集りて此城壁をなせし。此使者がアゼンスに達せしとき、已に出来揚りし。兎に角、此に付ては四方より攻撃ありしは事実なり。此ときは之等を破るに牛や牛を以て材木を乗せたる車を引き、之をラムと謂ひて、之にて此を破りし。此くて海軍の税を以て養成したる其力あるものは四方に兵力なき所に船をやりて物を奪ひし。遂にドリツク派に属する種属が初め約束にそむきし。故に約束にそむくを責めしが、之が此事に應ぜざりし故に村を焼きし。之よりスパルタは之をアゼンスに罪問し、之よりアゼンスを打つこととなり、此より三十年間ペロポニサスの争が之より起る。B.C.431。コリンスとコルシラ島より葛藤に開く。

B.C.479。プレーティヤの役よりB.C.431。ペロポニーサス戦争の破裂に至るの間は実にアゼンス全盛の時代にして、此間セミストクリース、アリストタイデイス、サイモン (Simon)、ペリクリーズの四傑相継で国政を秉れり。ペルシャ戦争の間に出でたる俊傑は終には僭主とならんことを疑はれ、市民の酷遇を受けて或は逐はれ、或は獄中に死せしを以て、アリストタイデス等出てアゼンスの政治を改革し、貴賤の

懸隔を廢し、何れの市民にも等しく政権を与へたり。尋で大政治家ペリクリーズ起れり。其治世 (B.C.463 - 429) の前後にアゼンは尤其繁栄を極めたり。之をペリクリーズ時代と称す。ペリクリーズが市民の景〔敬〕慕尊敬を受けたるは其宏才と其国家の安泰隆昌を謀れる不撓の志氣と其当り難き雄弁の力とに在り。而して其事業を挙げなばアレオパカス法庁の権勢を削ぎ、水軍を強勢にし、イニハタリヤ〔?〕に殖民し、又彫刻、絵画を以てアゼンスを飾り、其府城アクロポリス、アテナ神を祀れるバルテノンを初め、壮麗なる堂宇を建てたり。而して商業、貿易も亦発達せしのみならず、文学、技術も亦極円満の域に達し、戯曲、哲学、建築、彫刻の名家の輩出せしも多くは此時なりき。然れどもデロスにありし同盟諸国より徴集せる資財をアクロポリスに移し、次でアゼンの裝飾及其市民栄華の費を弁じ、又独りアゼンの国権を伸張して遂には帝国をも建てんことを務め、漸く同盟諸国の貢献を入れ、且つ之を臣属せしめたる如きは皆此諸国の怨恨を惹き起せし原因とはなれり。

蓋し此内乱の原因はアゼンスの強大に對せるドリアン同盟国及セベス等の嫉妬とアゼンスの欲望の為に招ける其同盟国の怨恨とにあり。而してアイヲニアン人種とドリアン人種との□怨、其他、アイヲニアン諸邦には民主政治の活氣発動し、ドリアン列国には貴族政治の氣焰尤盛にして、二者の衝突到底免る能はざるなり。アゼンスは即アイヲニアンにて諸民生国の首領たり。スパルタは即ドリアンにて諸貴族政府国の領袖たり。

之が実に希臘の禍なり。此時に當りてペリクリスが之戰をなすを阻せしが、天下の勢止〔む〕を得ず、此交戦をなさんとせり。此ときに

はスパルタは陸軍強きを以てスパルタは陸戦を専らとし、又アゼンスにては何処迄も海軍を以てして少しも陸を以て□〔敵か〕せざりし。而しアゼンスはスパルタの海岸を悉く荒し廻りし。此ときペルシヤにては大に衰へて遠征する如き王なかりし。此を以て希臘の内乱をよき機として大に吾爲として其弱きを交々相助けて希臘の勢力をのぞきし。終りに至りアゼンスに疫病発し、両方共に疲れはてし。此間に乘じて小種属が起り、此中に調停を試みし者等が漸く起りて、アゼンスに續きて勢力を得しはセベスなりし。此くて希臘は興亡常なり。此B.C.990の〔マ〕よりアレキサンダー侵入する迄の間はコ〔リ〕ンスが力を得て財を□しが、此希臘の内戦ありてより大に弱りし。

〔マケドニア〕

此ときにあたりて希臘の北方のマセドニアが大勢力を以て起りし。之が初め野蛮国なりし。此が二三代後フィリッパが出でし。此人の考にては、大なる考ありて、ギリシヤを先づ吾手に入れんとて俄に希臘の政に口を入れんとせり。然るに希臘は各種独立せしのみならずアンフィクチオニーの会員に加はりて希臘の政治を論ぜんとせり。此ときの機会を持ちし。此時にホーシヤン〔フォーシス〕の民が神に対して失礼をなせし。即、デルファイ神殿のアクルー〔アポロ〕の神の宝物をぬすみし。之をアゼン等は大に憤慨せしも之を責め攻討する力なかりし。此ときにマセドニアは兵を編してホーシヤンを征めしめし。此功により此会員となる権をヒリッパに与へし。此が初めて希臘に口を入れて希臘を□□に陥れんとせり。独り能弁なるデモセヌス（此時支那に蘇秦、張儀ありき）出で、此人がヒリッパを駁撃したる論あり

て、今も之書存す。全て希臘にては法廷にては自分にて之を答弁せざるべからざる規定なりし。故に大抵は勢弁家なりし。デモセヌスは二重の勢弁家なりし。此人は家統〔族力〕を少にして人に奪はれし故に之を取もどさんとて法廷へ訴へし。此人は此前実に訥弁極りなかりし。後に小石を口に含みて稽古せし。之によりて直りしと。又声が小かりし故、海の波の音に対して声を大にしたりして、又体のコナシを稽古したり。即、雄弁法なり。之が皆希臘の頃より始まりて大に之を研めたり。希臘人は此くして大にヒリッパを悪み出して、此デモセヌズも力を極めて攻撃せしも、大勢の帰する所遂にヒリッパの術中に陥りて有名無実の独立国となれり。

〔欄外朱字〕

B.C.337年八月、ケロニアの戦争に於て兩國の軍勢フィリッパ及び其幼子アレクサンデルの為に撃ち破られたり。フィリッパ尚進んでペロポネソスに入り、大にスパルタの地を略して之をメヌニヤ、アルゴス、アルカディアの三国に分与せり。此に於て希臘の自由は遂に滅亡せり。

アレキサンデル大王 B.C.336年（神武天皇紀元三百二十五年、支那戦国時代）、フィリッパの後を受けたり。時に年甫めて二十。

此くてヒリッパは陰謀者の為に暗殺されし。或る説にては亜歴を廢せんとの考の為に之を暗殺せしとの説あり。之此ときに亜歴王代りて立てし。然るに此人不思議にも馭□軍略に長ぜし人にて、希臘を初め皆王の幼稚なるを軽じ叛せしかど、王は実に父に優れたる英王にて、即ちギリシヤの虚をつき、之を其藩屏となし、ペルシヤを打ちし。此

軍に行くとき、歴史家等をつれて出でし。哲学の元祖アリストートルは実に亜歴王の先生なり。此く学問も好みしなり。之より進みて亜細亜に入り、印度に入りて、実に世界を我有とせり。此人は軍体の立て方は今日に似て、殊にフアランクスの軍体の立て方は、非常に長き槍を持たしめて槍の攻をなせし。而して皆甲冑を着し、前障の何たるを撰まず無二無三に進みし。之を以てペルシヤの軍兵も悉く敵せざりし。

此役たる、B.C.330にして、始め希臘人は波斯人年来の侵入に酬ひんとせしも、波斯は当時大国にして逆も敵すべからずとして止む。マセドニヤ強勢となるに及び、フィリッポは自ら大王と称せし位なれば、自国の力も知り、且波斯の勢力の衰へたることはサイラス親王が希臘的教育を受け、国に帰り内乱をなし王位を奪はんことを計りたるるとき、希臘より精兵一万人を借り、パーセポリスを攻めたることあり。但し、途中サイラスの死したるによりて止みしと雖も、一萬位の小数を以て波斯中心を蹂躪せんとの考をなせし程なれば、大王は此時波斯に敵することを得るの念を生じたり。

〔欄外朱字〕 此時に当り波斯は漸く衰頽に赴き、王権振はず、諸鎮跋扈せり。小亜細亜の知県サイラス其弟なる国王アルタクセルクセスの幼穉なるに乗じ王位を篡奪せんと謀り、スパルタの応援を得て国王とカナクサに戦ひ王軍を敗れり。然れどもサイラス此時死せしを以て争乱熄みしかば、クセノフオン、スパルタの軍を率ひ氷雪を踏み山河を跋涉して B.C.400、辛ふじて其本国に帰れり。是を一萬の退軍と云ふ。此事クセノフオンのアナバストに詳なり。

亜歴大王は豪勇にして、精兵あるを以てリデヤより進みて小亜細亜に侵入したり。ホームメル氏〔ママ〕等の詩文によれば当時の形勢如何を察するを得べし。アレキサンダー大王はゼウスの神裔なりと自称し、ジュピターを祭りたるゴリデヤなる所に解く能はざる革繩ありしが、大王は出兵の時此に至りて之を解くものは天下の大王となるべしと謂ふを聞きて王剣を抜きて自ら之を一刀両断となしたりと謂ふ。以て其意気の軒昂たるを知るべし。大王之より意氣益強大となり、ペルシヤを征討しダリヤスを敗り、フェニシヤ及古のアツシリヤ、バビロニヤを敗り、又軍を反して埃及を征服して古の回路〔カイロ〕なるナイル河口に於て亜歴山の都を立てたり。之が後迄やかまし。此都に學者文人を聘したり。此学は永く続きし。何となれば、希臘の学問は其内乱の為に學者皆此都の方に逃走し来り、此都は希臘の内乱後紀元二三百年頃迄は学問の淵源となり、殊に天下の書籍を非常に集めて亜歴大王の文庫と謂へば甚だ名高し。

此より復歸りてダリヤス王と之交戦皆之を敗りて、ダリヤスの軍は非常に壊乱して印度とペルシヤの境なるバクテリヤの方に逃走せしが、バクテリヤの將軍之を擒へてダリヤスを殺して首を献せし。此死せし事に就て種々の説あり。斯くてペルシヤを侵略し、其総督〔を〕誅し、其より愈兵を進めて東方を並〔併〕呑し、全世界を我有となさんと考を以て進軍したりし。斯くて遂に亜細亜に歩を進め、印度の境に入りしは歴史上実に重要な事件なり。当時此国の地理誌は少なきとして、現今其遺書中尤古きは大王の連れたる學者の作りたる記録あるのみ。故に其当時の道條は分明なり。而して印度の境に至り、インダス河を渡りしが、此時印度の王〔即北印度〕なるポーラスと戦ひて

之を擒へて放てしと謂ふ。或る歴史には亜歴がインダス河口に至りて亦取るべき国なきかとて、其侍する学者の之より外に国なしと謂ふを聞きて大に泣きしとあり。俗説にては実は其兵士永年の戦につかれ、又敵の弱きより、兵氣大に衰へ、殊に大王は国を出し当時は殊に英氣勃々たりしが、ペルシヤ都に入りしより意想外に富饒にて、此時始めて天子の貴きを知りし。即、ペルシヤ王の旧習によりて神の如く拝せられ、又、大王も此取扱を以て大に心に満足を与えしめて、希臘より連れ来りし功臣を遇するも又ペルシヤ王に於けるが如く冷遇を与へし。之より不平の心を起さしめ、会々之を諫言するものは手討となせし。斯かる有様よりして此永年間の戦に兵氣大に衰へ、之より一步も進まざるに至れり。故に取るべき国なきに非ず、率ふべき兵力なきなり。故に全く印度を征服せしにあらざりして、只条約を結びしと謂ふのみにて、即、此国に其重なる將軍シリウカスを残して帰途に就きし。

此時印度湾とペルシヤ湾と如何に連続するや分明ならざりし。当時は印度河に従ひ下ればナイル河に出ずべしとの説あり。而してナイル河を亜非利加と亜刺比亞との堺となせし程なりしが、大王は之を信ぜずして遂に此両湾を結び付けし。ペルシヤに帰る途中、熱病にて死せし。之に付て若し大王をして今後尚長く生存せしめば如何なる大事をなせしかとの想像説区々なるが、大王は政治家にてはあらざりし。其病篤き時、大王の死後此大領地を如何にすべきと問ひしに、世界の尤強きものに与へんと遺言あり。而し此死後其主なる將軍分立して、埃及は其將トレミー之を領したり。之は羅馬時代迄其家統続きて、シールズの頃迄ありし。又、小亜細亞よりアツシリヤ、バビロニア等の古ペルシヤ領はシリウカス之を領したり。此所をシリウシヤと名付

けたり。之が長く続きて所謂印度希臘とか或は印度と交通せしとか種々謂ふなるは此亜歴大王の時にあらずして、希臘風が印度に入りしは全くシリウカスの子孫が常に此印度に交通したりしなり。或る史に印度王の女をシリウカスが女取〔娶〕りしとあれど、実は然らずして、只娘のチャンドル・ゴフタ〔ママ〕を印度王に嫁せしめしことあり〔北印度王に〕。此時娘に随従して行きし学者中、メガセニーズなる人、此印度の宮中にありて、当時の事を筆記せしものあり。之が今に残りて当時印度の北部迄常に交通往来せしことを知るを得。

〔欄外朱書〕シリウカスはスレースを得、カサンデルはマセドニヤを得たり。

此当時、印度に希臘風入りし故に、印度の仏教等に希臘風ある所以なり。故に印度希臘と称するより寧ろ印度シリウシヤと称する方適當ならん。之シリウシヤは希臘と直接せずして、ペルシヤの後を継ぎし。此国は余程強国となりて、セリウカスの死後二三百年続きし。羅馬にても全く征服しきらざりし。都を二三ヶ所立て、希臘的文化を此に占有してペルシヤへ伝はらしめし。シリウカスは武人なるのみならず政治上の考もありて、希臘ペルシヤの關係は以上演べしが如く、他にマセドニヤ希臘は四方の国より之をねらひし故に、シリウカスも常に之を心にせしが、遂に終へざる中に此頃羅馬強大となり、之に打負け、国中は小国に分立するの止むを得ざるに至れり。即、希臘は此時全く滅亡したり。

即、希臘の政治界に於ける有様は以上言ふが如し。初め此国の王族は即ドリヤン、アイヲニヤンありて之がアゼンス、スパルタの両方に分れ、一は武を以て鳴り、一は文学を以て顕はる。斯くて此両方一致

したるとき希臘の国勢大に奮ひ、其後権力の競争上より次第に衰へ、マセドニヤに征服せられたり。マセドニヤの文化の進歩は希臘と同等にして、此文化が小亜細亜、ペルシヤ、印度、南は埃及に及びたり。以上、希臘の政治的の考の大略なり。

其他、希臘の考は、宗教にては初めは印度の如く多神教にて、前謂ふ如くヂウスを主神としてヲリンパス祭をなせし。此神は人間と同じ情欲を有して、此宗教に於ても其幾分かの変化ありて、埃及と交通するに及び、埃及風となりて、希臘の宗教は之れにて終れり。

哲学は実に現時哲学の根本となりしものにて、此学が古へ何処より来りしや知るべからず。古は、智は東より来ると謂へり。併し大方埃及より来りしならん。此の初め、ペリクリーズ前後に於て哲学が漸次出来初めて、其中には多くの学者ありて、仏法にて生れ代り生き代りする如き理を説きしものなり。此頃の哲学は今の物理に同じくして、大に四大の理を説きし。如此多くの学も開けしが、其国の哲学の名はソシト（ソフィスト）と謂ふより来りしが、此頃は人々一家の門戸を立て、師匠をなせり。之がアゼンスに於て尤盛なりし。之れアゼンスの主権政治よりして雄弁術、論理学も起りて、其中不思議の議論もありて、道徳学の論結もありて、或は倫理上此道徳説を論述せり。夫の有名のソクラチースの如きは道徳学を盛に説きし。氏の如きは哲学上尤重要な人にして、教育学上の事も此ソクラチースより出で、氏は人を教ふことをなさずして、師を取るを難じて曰く、師は実に産婆の如く只人体にあるものを取り出すのみにて甚だ切なし。故に人体にあるものを彼我相混ざる如くするは教育上必要なことにして、人体になきものを引出す能はずと。故に氏は少しも著述なくして只問答を

以て自ら人を教導せし。故に外に出で、学者の問ふことあれば次第々々に導きて其迷説たることを自ら了介せしむるが如くせし。其門人多数が中に才子なるガイリースの如きは大宰相となれり。後□□（空白）にてソクラチースは牢に入りしが、聖人は逃げ匿れずとて遂に毒を呑で死せり。其弟子にプラトーンなる人あり。氏は殊に政治学者中にかましき人にして、有名の共和国論あり。而してアカデミーの森に於て常に講義せし故に、今に学校をアカデミーと称するは之より起る。氏は宗教的の政治を説きて諸国の王に聘せられしが、其説通りをなしてやりそくなひしことあり。帰り途に奴隷に売られし事あり。又其後アリストートルあり。之れ一大哲学者にして、氏は演繹法、帰納法の説を始めし。アリストートルはマセドンのフィリッポは聘して亜歴王は此弟子なり。

（哲学）希臘哲学の大体に就て謂はんには、希臘哲学の根本は万有即宇宙論の範囲内にあり。即ち宇宙間一切万有を含むものが天地の主宰者にして、天地自然が之を主宰す。万有とは物は心、心は物と謂ふ如くにして、哲学なるものは物の真理を研究するものにして、心と物との區別難きものにして、或る物が茲にあり、例せば机此にありとするが、真に此物あるか、思ふものが迷ひなるか、又夢幻の如きか知るべからず。実、虚、心、物は相対して起るものにして、其間の相対比較を除きて之が解説を試みんことを昔より研究したり。中世の哲学は唯心論なりしが、近世に至りて数派に分れ、客観、主観、唯物論、理想等にして、希臘人の解説は事理一体にして、形善心亦善、心善形善と謂ふ意なりてふ説を立てたり。如此観念は美術の発達上大功ありしものにして、物の外観の美醜によりて其精神も又之に従て善悪なる

ことを称説せり。希臘のソクラチス曰く、我体は不完全なり。故に我説も未だ完全ならずと称せり。神は心(ママ)聖なれば完全無欠なり。故に其容貌体(態)度に於ても亦完全美貌をなすと。東洋にて所謂密教の哲学は之に近きものにして、希臘と美術上相一致する所ある所以なり。要するに希臘の哲学は哲学の尤初歩なりしを知らざるべからず。

文学の様子は如何と謂ふに、元より文学の初歩なるものにして、今日の欧羅巴の文化は全く希臘より起れり。就中、ホメルの詩の如きは此文学の尤も源をなしたる所にして、之は希臘のプタイ(舞台か)に属して希臘の文化の極点に達したるは(ママ)ペリクリース時代は余程精巧となれり。此時代より緻密にして、其一部分の精巧(ママ)したるもの、中に詩あり論もあるが、尤文学中に盛なりしは歴史演劇、即歴史の脚本なり。東洋にては演劇の發達は後世に成りて、当時尤之を賤しみたり。故に支那にては伎楽(戯曲か)等は古より發達を見ず、宋の末、元に至りて漸く之が發達したり。日本にては或は元祿以来大に發達したり。併し一部分の社会に行はれしのみ。希臘にては之に反して古より大に行はれたり。其源因は之を人種の差よりなることは尤謂はざるべからざるべきが、重に公会によりて快樂を取る所にして、多数の人の樂に供するもの多かりし。是れ即共和国なれば其公会のときは音楽、詩吟、演劇等が尤公衆の耳目を引きし。就中、演劇は尤良かりし故に、此政体の進むに從ひ、又祭典にも之を行ひたり。之よりして之が奨励法も行はれたり。アゼンスの如きは一時次の如き有様なりし。即、其第四階級の貧民にて財産尤低きものには演劇料を出さしめたり。之は演劇を見に行かなければ何をなして使ふも宜しかりし。故に他国に比して大に異なりて此風の行はれしを知るべし。希臘にて

は此演劇を以て氣風を振起せしむるものとせり。故に東洋にて之を見て以て一人の快樂を取るとのみならずものにあらずして、余程此中に国民教育と謂ふことを含蓄せり。スカイラス(アガタルコスか)、ソフホクリース等の有名なる人の作にて今日伝はらざるものにても数百篇ありし。尤重に作りしことはホメル詩中より作り出せし。神代のこと、戦争のこと等、余程之に深意を含蓄せしめて作りたるなり。

劇を二つに分ちて悲劇及喜劇となせり。此悲しきとは本然の理に於て非常の衝突ありて、何としても堪忍の出来ざるものは即悲しきにて、即、内府の孝ならんと欲すれば忠ならず、忠ならんと欲すれば孝ならずてふ如き時なり。又喜劇は之が調和せるものなり。故に悲劇は甚難し。故に希臘は之を以てなか／＼高尚なる觀念を養成せしめて、之を以て如何に処するかを大に研究せしものなり。喜劇は之より以後に於て大に發達せし。希臘人は全て真面目の風なりし。故に其喜劇にても吾人を笑はしむるものは頗稀なり。

希臘の絵画は評なし。希臘の□□(空白)は全く芝居の伎楽なり。変化あり音調あり節ありて初めて美の深味あり、画に於けるも亦然りと謂ふ如く、此かる論よりして先づ大に芝居を發達せしめたり。而して之が画は残品なく、而して演劇の脚本は今に存す。故にアリストートル等の事を知るを得べし。其道具立は尤簡單なりしなり。前謂ふ如く、アガサルカスが芝居の筋書きを書き初めしが、尚単純(純か)なるものなりし。此頃の芝居は只一人にて山や川を己れの姿にて現はしたり。然らざれば名技にあらずとせり。故に日本の能と大に同じき処あり。之余程文学上面白し。而して写生的の演劇は亜刺ビヤ風を伝へたるものにして、之とは大に異なれり。

希臘の文学、美術、政度は先づ此の如し。宗教は専ら古よりある希臘の古き神、即天地の勢力を代表したるものを持して之が死したるとき変化をなすものなり。即、或るときは天神地祇を拜せしが、後に至り少しく變りて、哲學者出づるに至り意味深くなりて、宗教と哲学との相混同したりと謂ふも可なり。故に希臘のホームル時代のヂユースとソクラチス時代のヂユースとは大に異なれり。即、ゴツドと天空とを一緒にしたるが如く、後には理屈上より之を考へ出すに至りたり。而し普通社会にては前と異ならざりしと謂ふ。

大体希臘の有様は此の如くにして、之が亜歴王の後に至り羅馬の為に亡ぼされたりしも、前の哲學家、美術家は矢張希臘に残りて、ローマ人は大に之を賞美して全く希臘の文化を受け継ぎしなり。随分醜〔殘〕酷なることをして希臘の擒を持て來りて之を己れの先生となしたり。故に其子を教へしめ、若し教へざるときは之を殺せり。故に詮方なく服歸したりしと。初めは大に勉めて漸く盛なりしが、兎に角羅馬の文学は此希臘の文化の賜なり。故に希臘亡びても此文学のみは尚依然と崇ばれて、四方より學者集まりたり。又、羅馬の兩分するに至りて東の羅馬帝国が前の位置を占め、ビザンシ〔ウ〕ム (Byzantium 今のコンスタンチノブル) に残りて、中世の文人等は皆プラトー、ソクラチス、アリストートル等を奉じて學びたりし。歐羅巴の他処にては野蛮人大に起りて、所謂暗黒時代なる時代が起りし。独り此東ローマ帝国は依然此有様を以て続き、之が千四百九十三年に至り、土耳其人のヲトマン家來りてコンスタンチノブルを陥れて土耳其領となりしとき始めて希臘の文化が原發生したる土地を失ひし故に、止むを得ず學者は伊太利に逃れし。此に至り、アリストートルの死後千五百

年に至り、即羅馬の東西兩分後千年後に至り、希臘の文化再び燃へ出で、今の盛に及び、今日歐洲の文化に及びしは、全く此希臘を基本とするものなり。

〔欄外〕 ユークリッド (本の名)

此中世記〔ママ〕の事は希臘にては全く亡びたりしが、五六百年前、亜刺比亜語に訳せられありしものを又歐洲語に訳して今日に残り、当時中世記を知るを得べし。

〔羅馬〕

前謂ふ如く、希臘の衰亡に乗じてマセドニア起り、此国の分立に乗じて羅馬勃興して、之より羅馬の歴史に属す。

ローマなる名は其都を立てたるローミラスより起(れ)りと謂ふ人、或はローマ国と称すれども實際羅馬国と称するはなくして、只羅馬なる都はありしなれど羅馬国なるものはあらず、ローマ帝国は必ずローマ都府人のみの帝国にはあらざるが、余程外国の歴史と異なる点ありて、即、ローマはアゼンス、スパルタの如き一都府なり。之が大なる版図を得、一時非常なる雄図を起し、一の大歴史をなすのみ。故にアゼンス、スパルタ国の世になきが如く、ローマ国なるものはあらざるなり。之が如何にして成立ちしと謂ふに、即、ローマは都府の歴史なり。即、タイバーの南岸にあるものが漸次強大となり、近隣の小都府を併略して漸次勢力を増し、遂に中央集権の有様をなして、他外国の下に就くを欲せずして漸次多くの都府繁昌したりしなり。此多くの都府の頭なる所ローマの主権にありて、之が全ての模範となれり。今日の独立政体の如きは多く此ローマより出づ。故に他の此国勃起前に於

ける諸王国とは大に其趣きを異にするなり。

此国の歴史を見るに、之も幾つかの段落に分ると謂て可なり。即、此第一期は何国にても同じき事にて、最初よりB.C.288年頃迄を指すにて、第二期はB.C.288年頃より耶蘇紀元頃迄を謂ひ、次の第三期は紀元八百〔ママ〕年頃を謂ふ。即、是より此三期に分ちて論述せん。

第一期は、初めは邑長一部支族の頭に立つ。即、名は王なれど一の主領に過ぎず。之が漸次発達して遂に都府政治となり、王族廃せられ、而して元老院を代表したる議員を以て成立つ共和国を以て終れり。之が第二期のローマの終りなり。即、其最初の王国風を離れて、B.C.200年頃より耶蘇紀元迄にして、此間には貴族的政党もあり、平民的政党もありて、之の領たる有名のシーザル起りて権力を専らにするに至れり。遂にシーザルより帝王たるの血統を保つに至れり。之が他国と異なり、軍入るを制せり。漸次□□□□〔空白〕に至ると膨張して非常に強大となれり。今日の如き交通の便なかりし故、全国の氣脈を通ずるを得ずして国を二つに分ちて此の東西二部の政治の中心をローマに置きし。即、第三期は此両分を以て終りとす。之より以後の歴史は中世期に属す。故に此にては説かず。之其後の東帝国は別段にローマの歴史として新しく發達せしものなし。而して昔のローマ文化の余光を僅かに保存せしに過ぎず。故に文学、美術に於ても歴史上甚だ必用ならず。又、西羅馬は北ゼルマンより勃興したる野蛮人の為に亡ぼされ、無論次のローマの名あれど、之を論述するの必用なし。故にローマは之を三期に分ちて、最初丘上に創都せしより一の団体をなして、先づ近隣の小都府を合せて漸く勢力を得、次の第二期は共和国の有様をなして諸都府を作りし時代にて、第三期は此多くなしし都を

インピレートル(インペラル)のもとに政治を執りたる三百年間なり。此三期に就て漸次説く所あらんとす。

第一期の初めは実に不分明にして、ローマの歴史家〔ママ〕は只口碑により伝はれば確かなること分らず。只口碑にてローマ人の好んで伝へる処によれば、ローマはツロイの後なりと謂ふ。即、此ツロイ王族の大將の一人が逃れ来りて□□□□〔空白〕を経てターバイ河に來りて、之が其所の尊〔村か〕長の女婿となりて其権力を相続して居ること三百年にして、其後家統の争ひあり(之れヌミトル王の時なり。弟をアミュリウスと謂ふ)、次男にして其兄を閉せしめしことあり。所謂嫡流の方に二子ありしが、此二子を殺し、つまり後を絶やさん為、山中に捨てられし。然るに何処とも女の狼来りて之が二子に乳を与へし。夫れが為、狼の乳を以て生長して漸く長するに従ひ、一人をローミュラスと謂、一人をレマスと謂ふ。此二人が生長して父の仇を報ずるのみならず、此仇の居る都府を奪はんとて城を城〔築か〕く位置を評議して、此頃は古法もありしが、重にローマの古法は□〔空白〕羊、牛の腸の屈曲等の如何を見て、之に依て之に占せし。又、鳥の飛び方によりて城の位置を定めしが、ローミュラスが勝て此都を立て、ローマと称せしと謂ふ。之れローマの歴史家の皆好んで説く所なるが、之は只口碑に伝はる事にて一も証跡なきが、美術上此事蹟を現はして往々世にあり。而して羅馬を代表するものは後に旗竿の上に鷲を付けし。之れ即ち世界の端迄飛び回ると謂ふのを代表したるにて、此事は尚之より後の事なり。独逸、ナーストリア、ロシヤ等之を用ひるはローマの帝王がシーザルなりし故にロシヤ帝をチャール〔ツァール〕、独逸帝をカイアル〔カイザル〕と謂ひて、皆シーザルの血統を保たん

とせり。初め此羅馬は夫の狼や二子の記号を〔にて〕代表したりし。而して其血統はツロイの血統の剛勇なる性を汲みて此ローマも武勇にては天下無双となれりと。之が口碑に残りて実にやかましきことなり。大体人種上より謂へば、敢て此口碑も非常の相違なからんと思ふ故に、寧ろドリツク風にてスパルタ風に近き方ならん。故に亜細亜人の歐羅巴の方に進入するに従ひて、或は希臘人が未だ渡らざる前に此以太利に住ひしこともあらん。其前後の事分明ならずして、イタリはドリツク派が大に侵入せしが、此一つ、メランと謂ふ、此王はローマ人の先祖となりしものなり。夫のみならず多くの他のものを征服并吞し、タイバア河の口にては天険の所ありて一度此処に拠れば天然の嶮ありて防禦に便なる所あり、之に海賊か何か拠りて之がローマの根本となりしならん。之に七つの続きたる山あり、ローマを七つの山と謂ひ、又之を枕詞に用ゆるに至れり。之によりて例の団体を作りしなりと謂ふ。此に掘り出す□□□〔空白〕を見るに、始めは実に小さき国にして、此七つの山の先きにハニバニヤ〔タルクィニアか〕とて平地の沼ありて要害堅固なる所なり。之に海賊の頭など来りしならん。此の如き土地は天下至る所にありて、如何にしてローマ人が、他種属の多きに、たとひ武あるといへ、此所に播殖せしと云ふに、ローマ人民の立てし町村制の考が他と異なりて、他にもイトラスカ、ラチン、ザピン等ありしかど、此方は他人種を入れずして己れの国のものならざれば市権を渡さざりし。ローマ人は公撰を以て王を撰みて其周囲のあぶれものが此所で権力を得たり。故にローマの初めの王は皆隣国の蛮族が王となりし。故にローマにては好んで大に他氏族を容れし故、次第々々に大となりて、ラシームにをるローマ人は全体ローマ的とな

り、今日ラテン種と称するものは即此ラシーム語なり。初めの歴史はアツシリア〔ママ〕近辺に居て此辺の権力争ひをなして、中には暴君あれば、之を殺せし位ひにて、別に代〔変か〕りたることなし。故に面白からず。第一期の終りに於て、暴君の尤甚だしきものを退けて、之より余程自治制が固まりしと。時にローマの勢力大に内に延びて、之を遠方に及ぼさんとせり。故に一の機会あるを待ちしが、時幸ひ種々の機会が生じたり。即、其中重なるものを挙げば、以太利の南方は小都府が外種属に苦しめられて援兵をローマに請へり。以太利の至る所には此ギリシヤの殖民地ありて、亜歴山大王の死せし頃になりて此殖民地のもの本国の命令の至らぬ故、反を起し、又貢をせざる殖民地が起りし。之を憤りて亜歴山大王の叔父なるエパイラスなる王の如きは、殖民地の無礼を責むる為に兵を使〔遣〕はせり。之を防ぎ難し〔き〕故、小都府等兵をローマに請へり。此とき他に之に應ずる種属あらざりし故、忽此請に応じ、之と同盟して此以太利□□□〔空白〕の間にあるものを全て己れの有となせり。北方の於けるも同じく此政略を行ひたり。此く伊太利半島を半分程保つに至ると、ポツ々々あるものは漸次皆己れの有となせり。即、此戦はローマの門出の戦なりしなり。

繼で小さき戦争が多く続きしが、此頃より第二期となる。此時代は、一方にては自国の自治制となり、一方には世界の侵略となりて、近隣より始めて伊太利、カルセージ其他目の前にあるシ、リー半〔ママ〕島を己れの有とせんとして、此に於てか非常の争生じて、之がローマの運命に非常なる關係を及ぼせり。何となれば、シ、リーは希臘の殖民地あれど、阿非利加の北岸なるカルセーチの殖民地ありて、之は元フ

ヒニシヤの殖民地なりしが、地中海の権力は全く此カルセーヂが保ちしと謂ふべし。此国よりして始めて世界を一周せし人出しと謂ふ程にて、此人民は戦を好まず大に商法を好みて、始め希臘とフヒニシアとの戦の時にも何れにも就かず、スパルタとアツシリアとの長き戦にも此の如く、只商法をなして營利を事とし、亜歴山大王の時もカルセーヂのみは取られざりし。故に此所にては自ら軍人足らざるも、金力に任せて雇兵を入れたり。此頃の浪人の如きものは金さへやれば皆集まり来りし。此風大に行はれて、カルセーヂに於て大に之を行ひし。而して他と異なり、父母妻子を人質となせり。故に他の雇兵よりは強かりし。此くて一時は余程盛んなりしが、ローマ漸次勢を得て、シ、リーに手を延ばさんとする第一の害物はカルセーヂなり。地中海上殊に然り。故に此カルセーヂを何とかして征服せんとせり。而してシ、リーには希臘の殖民地もありて、此カルセーヂの殖民地と希臘の殖民地との間に争闘ありて援兵をローマに請へり。故に此機に乗ずべしとて、シ、リーに渡れり。此渡り方に於ても実に小説的の面白き話ありて、ローマの大将が偽り自ら擒となりてカルテージ城に行きてカルテージの大将とくして「ママ」殺したりして、其中に城を攻め取りしとの説あり。ローマは武を用ひし故に軍談めきたる話多くして、此くてシ、リーの極めて関門なるシラクユースに入りて他の殖民地を取りしが、尚ほカルセーヂと海上にては争ふ能はざりし。之れカルセーヂの船は非常に以太利の海岸を荒し回りし故に、ローマ人は之を□「援か」ふ船舶なかりし。所が面白きことには大風ありてカルテージ舟がローマの海岸に漂着せり。故に急に之を模造して作りたりしが、其漕ぎ方を知らざりし故に、陸上にて椅子の上にて之を漕ぐ稽古をした

り。二三日経てカルセーヂと争ひて、カルセーヂ舟に衝突して向ふの舟に飛び乗りて陸船同様にて非常の勢を得しが、海上にては夫れ程當る能はざりしが、カルセーヂにては元より争闘を好まず、殊に党をなして一方にては主戦論起り、他の一方にては平和論ありて、此平和党が権力を得る時は折角他と交戦中にも呼び帰されて、大に弱れり。然るに此に有名なるカルテージの豪族中名將を出せり。之が即ちハンニバルなり。

此人の父はローマ人の為に殺されたり。故に之を自分の只の名譽として、はたなく、真の父の仇を打たんとて熱心に之を考へしにて、故に海上の戦よりは一層進んでローマを取るべしとて常に之を主張せり。故に陸上にてイスパニヤを征服せし。之れイスパニヤは金が生ぜし所なればなり。カルセーヂの金の□「空白」入に於て大にやかましき所なり。是がハンニバル家の領地の一となりし。此所にて軍を整へてローマに侵入するとの説騒がしくなりて、ローマにては大に恐れて之が用意をせしが、此人は実に神変不思議にて、ハンニバルの目的は只ローマにあれば、途中にて無益なる戦をなさず、巧みに之を避けたり。世に此大軍にてアルプス山を越へしは之が始めなり。此所を亜歴山大王も通りしが、之が始めとなりし。此人は兵力を分つ法を巧みにし、ローマ人は之に當る毎に敗北して、遂にローマにて信長流のフハピアスなる人出でし。度々逃げし故に、之より逃げることをフアピヤス流と謂ふ。此く勝ち続けて居る故、長き戦中に以太利の奢りを覚え、又疫病の大に起るあり、又本国にては平和主義を取りてハイロ「賄賂か」を用ひたりして、只此ハンニバル一人にて苦みたり。後に遂に呼び還されてカルセーヂに帰りたるが、カルセーヂの亡びたる後

にて、遂に自殺するに至る。実に哀れなる有様にてありし。

此くて、結局ローマの中にシピヲ〔スキピオ〕なるもの起りて、ハンニバルを敗りなどして遂にカルテージを征服して、城中一の重〔な〕りたる石すらなかりし程非常なる遣り方をなせり。此くて地中海は全くローマの海となりて、埃及を取〔り〕、希臘を合せ、又此カルセーヂを服して、後に希臘諸邦、小亜細亞、マセドニヤに行き、又是迄亜歴大王の領地なりし中にも侵入したり。其中埃及はクレヲパトラ女王の頃迄保てり。後に印度に接したる領分のシリユーシヤは尤長く抵抗をなせり。之より北方のゴール、スパニヤ、今の独逸の半分迄侵入せし。此くて欧州当時の国のはて迄進み行きて、第二期は全く戦略を以て終りし。

前謂ふ如く、ローマは三期に分ちて、第一期は徐々に内部の勢力を養ひ、第二期は進で天下を征服するに従事し、第三期は此戦略より版図を合せ之を統治する帝国なるも起れり。此第二期の終りに於て種々兵力を以て時の世界を風靡したり。尤力を極めて争ひしはフヒニシヤ殖民地中カルセージにて、即、亜歴山大王領地中尤富有〔裕〕なる土地と地中海権を争ひて遂に之を平げ、後後向ふ所敵なく、爾来大に振ひて北西□□〔空白〕以□□〔空白〕アリヤチツク海、イリ□□〔空白〕島、小亜細亞に及ぼし、南はカルセージの旧城なる現今のモロッコ、チュニス等、及埃及を取り、就中シリユーシヤは尤も長く抵抗を試みしが、之れ亜歴王の宿将の止まりし処にして、後までローマの版図に入らざりし。然し地中海の沿岸は全く手に入れしのみならず、アツシリヤ、バビロニヤ、ペルシヤ、マセドニヤの如きは其中心と遠く東にある故に、西の方の諸国を版図に容る。実に難事なりしが、其伊太利が其版図の中心となるに至り、欧州を手中に弄するの機会を得た

り。乃、今日の開明に至りしは実に伊太利のローマありし故なり。

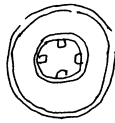
此頃の歐羅巴は実に不開の有様にて、イタリー、ギリシヤに比すれば月氏等と趣を異にせず、ドイツの如きは当時不定の住所にて森林に出入し、獣皮を割いて衣となし、又屋根をふきし程にて、此頃は実に野蛮の有様にて、其身体は偉大にして勇敢なりしが、ローマの鍛錬したる兵には当る能はざりし。其中に幾つにも分れをるが、今のフランスと南方ドイツはゴールと称して、之は今のゼルマン人とは稍異なりて、然し、元は同種ならんが、欧州の中原に早く勢力を得しことはドイツ人よりは早かりし。寧ろゼルマン人に追はれて歐羅巴の西のはてに逃れたり。此くてゼルマン種属来り、マレマス——〔ママ〕は今の□□〔空白〕にて、其後にスラボニアンの露西亞人が来りし。之はローマの文化が通らざりし故、余程野蛮の風を免れず。故に当時ローマに歸したる版図は皆文明となりて、乃ち英国はアングルと謂がかりて、此に來りて独逸のサクソンと一緒になりて、此所に住みたり。之等が皆野蛮なりし故、此方を攻むるは実に困難にて、ローマの將軍に於ても之等を征するは甚だ面白からざりし。何となれば、南方の□□□□〔空白〕を征服せば非常なる分捕ありて、北方森林中のものは夫れ程功名あらざりし故に、此北方を取ることは大に後れたりしが、後には必用上之を取るに至る。何となれば、北方の人種はペルシヤ、アゼンズの月氏に於けるが如く、時々伊太利の富源を望みて侵入し來りし故に、之を防ぐに大に困難を感ぜし。故に漸次北征して遂に北方に力をつくすに至る。而しローマにては此北方の征服したる人民を使役して、即、北方のゴールを攻めて其士を養ひ、之を以て戦はしめたり。之を以て漸次北方にも此文化を受けてローマ化するに至る。而して東

方に用ゆる武の結果も殆んど均しき結果ありし故に、ローマの広まりしは実に此の如き政略を以て広まりし。

政体上如何なる有様と云ふに、ローマの政体は第二期に於ては民主政治にして、ローマに昔より多き貴族なるものと平民党との二派に分れて、此二派の調和したる時と此軋轢とによりて支配されしと謂て可なり。併しローマにては全ての版图中にある都府中尤大として勢力ありしかど、広く武を用ゆるの弊は之より出ず。如何に何となれば、如何に人口夥多なりと謂へ、此都府丈の人口を以て世界を制禦する程の人口出る能はず、為に結局ローマの権利は殆んど名のみとなり、大なる領分のシリヤ、グリシヤ、ペルシヤの後を平げたるポンヘー〔ポンペイウスか〕が数十万の兵を皆外に要してをるときは之れに對してローマの衆議員、貴族員等はローマにて命令を下しても之を聞かざるに至る。古昔は余程良き政制ありて、内外の権利を牽制し、大將軍は二年毎に交代するの制なりし。然るに軍隊なるものは懸軍万里強敵に向ふものにて、此期限に及びて忽ち交代し得るものにあらず。又歸りて市民となるを厭ひて、期限より長く戰を統ぶる風習をなすに至れり。此争ひが第二期の末にて皆外の將軍の権利争となり、此中に□□□□□□〔空白〕、マリヤス、スラは此争なり。殊に尤有名なるものはポンペイとシーザルの争闘なり。此のシーザルは実に古今の名將にして、シーザルの名より王帝の名出でし程にて、此人の伝は面白き事ありて、シーザルの尤力を致せしは専ら西方のゴール、ゼルマン地方にて、之を征して英國に渡りたりしが、余程面白き人にして、又權略家にして、殊に學者なりし。此ゴールと戦ひせし日記あるが、詳に其陣立を記し、其他地理の事を載せて今に残る。之は平民党より撰拔されたり。

ポンペイは又名將にして□□□〔空白〕の東方に起りて甚だ有名なり。一は平民党の代表者にして一は貴族の代表者なり。互に軋轢したりしが、未だ大破裂に至らずして互に人望を求むるを勤めて、為に頗る派手なることをして人望を引きし。中には非常に富豪もありて、此二人の間に亦立派なる人もあり、之等が如何なることをして人目を引きしかと謂ふに、戰より歸れば凱旋式を派手にしたり。此始め、凱旋門は戰に打勝ちしときに行ひて、二本の槍を立て、一本を横に互して捕虜をして其内をくゞらしめし。此くすれば全く帰服したる征なり。之は寧ろ野蛮人の真似をしたるにて、此ローマが真似をし始めしより起れり。今も残れるが、此ローマには大なる見世物場ありて、実に壯觀なり。此凱旋式は中々やかましきものにて、斯く々々の戰の勝ち方ならねば凱旋式を許されぬ定限ありて、之を□□□〔空白〕等にて議せり。其仕方にも種々ありて、例せば分捕品の陳列をなし、或は捕虜を引回し、或は牛を率きたり。之は祭に食ふものなり。又捕虜をも殺したりし。又、城等の画を描き、之をかつぎて回し。又、元老院議員、上院、下院の如きも正列して將軍の親戚及將軍は紫の服を着し、例のケマンを持ちたる人、將軍の後に立ちて捧げ居るなり。而して將軍自らは驚のつきたる象牙の杖を持ち、又、ローレルの枝を持ち、其側にて汝は人間である、汝は人間であると呼ばしめし。之此時は神と同じ取扱をなせし故に、之が慢心を抑へん為にて、其後より兵士従ひ、一は悪口を謂ひ、一は之を称揚す。之れ実に支那周の礼の如し。此く凱旋式許されねば城に入る能はず。初め城外にてマルスの戰争の神を此処に祭りて捕虜の首を切り、牛を切りて祭り、而して此会食をローマ一般に施したり。而して其初めは余程質素之風にて、議員にて之を

許さねば之を行ふ能はざりしが故に、小戦には直ちに城に入る能はざりし。後には將軍の権力強くなりて、少しの戦にても凱旋式を行ひ、又見世物をなしてローマ人を楽しませしめし。始め、伊太利人の象等見たることなかりし。後にイルリヤ〔?〕の征服せしときに此象を分捕して帰りし。故に之を柵の中に追放ちて遂に之を殺して慰みし。此後アレナを造りし。今の劇場の形は之より出でしなり。之をアンフヒシアトルと謂ふ。



此中に猛獸を入れて戦はし、或〔は〕奴隸、囚虜、若しくは罪囚をして互に格闘せしめたり。後には漸く士人、元老院議員、甚だしきは婦女子にして格闘場に入る者あるに至れり。其残忍非道なる極まれりと謂ふべし。

今もスパニヤに残れる闘牛会の如き、又之より来る。即、一勇士馬上にありて猛牛と闘ひ、巧みに其角を避けて遂に之を殺戮す〔校長の実見談〕。又、惨酷なる有様なり。又、後にキヤピドロとて猛獸と闘はしめしことあり。今に遺存する此コリジウムなるものは当時実に十万人を入るを得しと謂。破壊したりしも、今に其半を存す。羅馬にては穀物無料配布の制ありて、府民は其恩沢を蒙りて坐食す。之を以て人民をして怠慢に流れしめたり。

前述べし如く、両党の争遂に勝は平民党に歸したり。此間互に勝敗ありしが、シーザル遂にポンペイを敗りて、其後ポンペイは回復を計りしかど及ばず、天下は全くシーザルに歸せり。セークスピアと〔の〕謂ふシーザル奇談中にある如く、此後貴族党のものあり、又シーザルを悪むものありて、又正義党等起りて、遂にシーザルを俄に誅殺せり。然れども天下の勢ひ帝政に歸するを免れずして、天下はシーザル党の

三人の中に其政權を分つに至れり。此三人中シーザル養子なるユクタピラス・シーザーが他の二人を追ひて、此に至りてローマ〔を〕初めて統一してインピレートルとなれり。(インペレートルは今の帝にして、之は大元帥なる意を含み、即、命令官又司令官長なり) 此後は即第三期に移る。

其後はシーザル家にあざればローマのインペレートルとなる能はず。二三代を経て此本系は絶へしが、後他家の人にも何々シーザルと称したり。此くて支那漢の〔ママ〕六朝の時など、支那の境にて此国と交通したりし者あり。此時ローマ人に汝の主は誰ぞと問ひしに何々シーザルと答へたり。故に此シーザルなる語は帝なる語と同意味の語なることと思へり。ユリガスタスとは大と謂ふ意を含む。名はユクタピラスなるが、前叔父の位を継でユクタピラス・シーザーと称したり。此人の事蹟は多くあるが、ジュリアス・シーザルの撥乱の後を受け、自ら守成の器を以てし、此二人を以て帝国の基礎を和調したりしなり。而して其力を用ゆる、徒らに遠征に着恋せずして此帝国を守成するの方針を以てし、其皆外の將軍の如きも自家の親戚に属するものを以て多く之に当らしめたり。故に之より皆外の將軍の権力の増加して、シーザル家の危きを来すが如きことなきに至れり。タイベリアス・ゼルモニカス〔独逸を従へたる人〕の如きは実に名將にして、独佚に於て更に其判〔版〕図を開きたり。かく力を内地に尽せしことは此帝の殊功たり。其後、元老院の権限、或はローマ本部に要する市政を定め、或は法律を制定したりき。殊に工事に大に力を尽して、第三期羅馬の美術なるものは実に此時に起りたりしなり。大に希臘人を雇ひて大工事を興したり。此時に當りてローマは実に太平なりしなり。

此帝の生存〔在位の誤りか〕せし間は実に四十四年にして、此間独りの手を以てローマの大帝国を掌握して実に長き太平を致したり。

其他、尚此間に起りし著しき〔こと〕と謂ふは耶蘇の降誕之なり。

即、今を去ること千八百九十六年にして、此帝の時、即秦平無事の日に於て生れし。耶蘇の書に所謂其予言なるものによれば、救世主は必ず天下泰平の日に生るべしとありて、即、此秦平に生れしなり。此羅馬太平なることは恰も日本暗れと謂ふ如く、即、北はスバルタ、ドイツより南は埃及に至る迄其版图中一国の戦乱ありしことなし。此時代は実に世にやかましく謂ふことにして、此間に耶蘇生れ、夫より生長して種々の政略を以て四方を回りしなり。此事は宗教の部に於て陳述すべし。

之より繼で政治上にてはローマ帝国成り立ちし故に、之より帝王の歴史となる。即、帝王は長く続きしが、始めはシーザル家の養子に非ざれば帝王となる能はず。即、成立の法を立ちし故、始めユーガスタスの肉親のものなき故、自分の連れたる後の□〔史実は連れ子——編者注〕を養子となし、之がシーザル家を名乗りて、之より永く続きたり。此中には名臣もあり、然らざるもありて、羅馬の歴史は之より〔つまらぬ〕支那六朝史を読む如き感を与ふ。而してシーザル家断絶するときは、其時皆外の將軍の重きを押して帝とせり。而して当時賄賂詐偽を以て帝王撰まるゝに至れり。此弊高じて紀元三百年頃に至り、ローマは一人の手にて支ふる能はず、遂に二国に分れて両帝国起るの必用に逼りて遂に兩分したり。而して東の帝国は無事にて其後千百年程続きたり（小さくはなりしかど）しが、西の帝国は北方より来る野蛮人の為に荒され、遂に滅亡せり。其代りには中世が之より起りて所謂古代歴史は此兩帝国の成立せし処、即、コンスタンチノブル（今

の土耳其の都）の都の立ちし処を以て古代歴史は終れり。而して東羅馬帝国は欧州文明の大勢に関せず、故に欧州古代歴史は西羅馬帝国の衰亡と共に亡びて所謂中世の封建時代となり、東ローマは一小国に止まり、中世時代の町村制の為に分れて所謂中世風が起る。

帝王の話は何くも同じくして、歴史上一々挙ぐるを要せず。只羅馬の帝王の此頃如何なる有様なりしかを知る為、此に一二の帝王の事蹟を話さん。即、前謂ふ如く、此龐大なる帝国を以て一人の手に歸するを以て、政治に軍事に無限の権力を得たるなれば、之が良ければ非常の事をすれども一歩誤れば非常の酷政に陥るを免れず。其勢たる、支那の帝室に近し。実に東西の歴史を讀みて感ずるは漢の高祖と羅馬のユクタビアス・シーザルと能く似る所あり、又項羽とポンペイと類する所あり。勿論時代は異なるれど、其或る点に於て似る所あるなり。即、ユクタビアスの帝位になりたる位置は異なるれども其氣質に於て大に等しき点あり。呂公が有民を亡ぼして□□□〔空白〕を挙げし如く、リビヤはユクタビアスの死後己れの家を良くして、リビヤの子に至りシーザルの名を取れり。リビヤは八十六歳迄生存して、タイベリアスの死する迄生存して、ユクタビアスが尚世にあるが如く思はせたり。タイベリアスが繼で、暴君なるが、此後リビヤの愛したりし人を殺したりし事ありて、実に残忍なる人なりし。タイベリアスの子の中に三人ありて、其間に争ひを起して、遂にゲイアス・シーザルを以て帝位に即かしめし。之は世にカルギラと称す。

今、ローマ帝の風の如何なりしかを知らんが為に此人に附て話さん。ゲイアス・シーザルの位に即きしは二十五年の時にして、余程ローマ帝の無制限の権を保つことを勤めたり。世にシーザル家は狂気

すぢなりと謂ひて、此人も神経質にして、夜の宮中をうなり回りしと。之がラクタビヤス即クローヂヤス家の特質なりしと。而し此先きの王も惨酷なりしかば、此王の少壮なる頃は未だ政に手を出さず。故に人望良かりし。即、東洋の風と良く似て、密かに奏上して人の罪を訴へるものあれば、其訴状を議員の前にて毎日之を焼き捨てしと謂ふ。之は支那の風に大に似たる所あり。此元老院は殆んど諫議員の如きものにして、此頃歴史官なるものありて、ローマの歴史を書けり。其中には帝王の悪事あれば之を直筆するを得ざりしが、此元老院の勢力衰へてよりシーザル家の少しにても不利益の事あれば、之をばからず直筆せしめたり。此の如く其□「幼か」時は名君なりし。又、元老院の俸給を増し、又、民に物を恵みしことなどありて、其他□□□「空白」兄弟の如き非常に遠方に捨てられしを厚く葬むりたることなどありて、此の如き話しは実に古の支那と能く似たる所ありて、「以下、文意不明」支那の宋、明の頃は実に此時代にして、之を中世にて統治して、日本は今中世を抜けて之が漸く真文明に入りかけしにて、今の支那にては尚此等の話ありて、宜「喧の誤記か」しき有様なり。

実に此王は初めは良かりしならんが、自分を制限せしは其少壮の時のみにて、漸く驕慢の心著はれて、時は太平なりし故、恰も支那のケンリウウ「乾隆か」帝の如く、始めは名主なりしなれど、之が後に世の泰平に慣れて驕りに長ぜしが如く、大に驕りに長じ、珍奇の品を好し、或は賄賂を行ひて帝にあるまじきことをなして体を悪くし、神経を悪くせし。故に大に人望を離れしを見し故、之より只其体を防ぐ「ママ」事のみを考へし。故に自分の継世となる如き人は努めて殺す事を考へて、悪き奸臣を大に近づけたり。

其他は只暴君の事のみにして、或は人の災害を喜び、ローマ「人」の悪事をなすとき、首を切るに便なれば、ローマ人の全ての首一なれば宜しと謂ひし王もありて、大抵皆此の如き王のみにして、自分の御殿の為に人民の家を破壊し、此に非常の建築をなしたるもあり、又、橋落ちて人民が陥りるを喜びて見てありしが如きもありて、悪口のみ多く、ニーローの如きは火災を見て琴を弾じて喜びて見物せしと謂ふ如きありて、ローマにては大に贅沢を競ひて天下の珍味を食ふを喜びて、或は孔雀の舌を食ひ、鶯の胆を取りて之を汁になすとか、或は駝鳥とか成る丈遠方よりの者を好みて、此等の王の中には他の人が幾ら金を費しても我に勝るものなしとて一食八万ポンドを費せり。実に四十万円なり。之れ不思議の価と謂ふべし。只し、一食のみならず、三寸の喉を過ぐるのみにて甚だつまらぬとて、ローマの食事は三度食うを得し。即、一度食して後に美膳に向ひて、吐剤を飲して、氣持悪き故湯に入れり。今も某帝の浴場ありて、其壯麗なるは実に天下無双なり。之は非常に大なる風呂場にて、其中には大なる大理石等の桶ありて、深さ二尺ありて、其側には楽を奏する処あり。又、其側には水の流れ出ずる所ありて、実にローマは湯の為に亡びしと謂ふ程にて、此浴室の構造は実に美なり。余が支那に行きしとき、驪山の浴室に行きしが、今にては大に小となるが、之が其ま、玄宗皇帝等の浴室の如きあらば、実にカリギス「カラカラか」等の浴室と譲ることなかりしならん。又、支那の□□「空白」にも此浴場あるが、之も幾らか此當時のものを類推するに足る。此くて後、食して又吐き、又食ふにて、必ず三度食したりしと。之を見れば紀ノ「伊」国屋文左の豆腐を伽羅にてあぶりしと謂ふが如きは小事なり。又、人間が生れしとき、之に

金箔を附けしことありしが、皆窒息して死せり。当時人間は質素を守るべし。併しシーザルとなれば少しは驕りて宜しと謂ひし人もあり。

此く人間驕慢となりて、元老員中〔に〕は自慢の雄弁家ありて、人賞讃せざれば大に罵りしと。又、自身に大に力自慢にて、後に格闘をなして猛獸と戦ひたり。又、人間とも格闘して之を殺せし。此等は幾らか工風〔夫〕のありしならんが、此フリキリス〔?〕は自分の像を立てしことあり。リビー□□〔空白〕の如きは驕慢にして、天下のつまらぬ書を読むなど謂ひて公けの書をなくなせしと謂ふ。又、シーザル家は軍功なかるべからざれば、或る王は英国に渡る処に一隊を集めて喇叭を吹き、軍隊を整列せしめ、偕武器を捨て、海岸に貝を拾へと命じて、之を車に載せて元老院に送りて之を海の貢物なりと謂ひしとあり。之は古へ真珠貝等の出し処にて、之を取りしを悪口より此くは謂ひしならん。尚種々の事ありて、敵なき国のみ征して、或時大人を撰みて大人国を征したりと謂ひてローマに帰りしと謂ふ話もあり、又、有名の話柄なるカルギラ・シーザルが元老員と宴会の中央に於て非常に失笑したり。何が面白きかと問ひしに、我は君等の頭が此床の上に落つるを思へば非常に面白しと答へけり。此の如くなれば、人心の面白からざるは自然の理にて、遂に此王を誅せんとて、演劇を見てをる間に之を誅戮したり。故に前のシーザルの子を立て、又後にクロージヤスを立てし。此王は良かりし。又、ニーローなる王もあり。此の暴君ありてローマ帝政は終れり。先づローマ帝政の大略は此の如し。

万国歴史 続

前述べしが如く、羅馬帝室の腐敗は実に其極点に達したり。而るに

此時に当り、耶蘇教起りて、尚ほ続く所の羅馬帝のことを述べし。

カルギラの暗殺後、帝の継子なかりしが、当時尚羅馬にては前きの共和政の精神残りて、此時に乗じて原の共和国になさんとの論者起りたりしが、併し兵隊の方に於てはシーザルの名を重んじて、遂に又カルギラの叔父なるクロージヤスを帝としたり。一時大に恐れしが、軍隊の方に於ては大に之を貴みたり。此に於て前きの共和政之党者帝に反せんとせしかど、遂に果さずして止めり。此時に当り、軍隊にては賄賂を以て帝を撰挙すること起れり。即、兵士一人に若干金と定めて其撰挙を乞ひたり。後に至りては唯之に賄賂を用ふるのみならず、帝位を□〔空白〕買するに至れり。而して此等の事已に此時に現はれて、クロージヤスは大に金を軍隊に分てり。羅馬正史に於ては、此帝を大に柔弱なる王となせり。併し、此帝は先王に比して慈仁の心深き帝なりしなり。只□□□□□□□□□□〔空白〕の二三人を殺せしのみ。性質上弱き所ありしと見え、不良なる后の為に政を乱せしことあり。然れども、一般羅馬帝國中は此時に泰平にして、殊に独佚に其版図を広め、其権力は為に外方に振へり。

クロージヤス初時は大に良かりしかど、其終りの后なるアグリッピナは実に奸黠なる人にして、其連れ子なるニーローを帝位に即けん為、遂にクロージヤスを毒殺したり。実に羅馬帝室の腐敗は此の如くにして、ニーローも此シーザル家の養子となりしなれば、矢張シーザルの名を取れり。後又クロージヤスの実子を殺せり。此ニーローの五年と称して、其五年間は無類の泰平なりしが、漸次年を経るに従ひ驕慢になり行きて、始め其母と政權を並び行ひたり。当時帝位に即きたるときは其貨幣に其帝王の顔を鑄ることなりしが、此時はアグリッピ

ナも并せ打たせたり。又、政治を聞く時も、又椅子を并べて之を聞き、又行列の時も同じ輿に乗りて行けり。然るにニーロー長ずるに及び之を喜ばず、反て其關係をなくせんと欲して之を暗殺せんと欲し、或時アグリツピナ舟に乗りてペーヤ〔バイアエ〕海岸を渡りしとき、難船せしめて之を殺さんとせり。然るに果さざりし故、遂に人を遣りて暗殺せしめたり。之より益暴虐の所行をなして、宮中の奴隸上りの官者を寵して之に天下の事を任せけり。王は音楽自慢にして、此時ローマに有名なる大火ありて六日間続きたり。羅馬は十四防に分れしが、其六つは全く焼け、四つは焼けたると同様に荒敗して全く新都を立てざるべからざるに至れり。ニーローは之を快としてツロイの戦後は此の如くなりしならんとて大に喜び、高山に登りて琴を弾じて見物したりしと謂ふ。此く己れの宮殿を建〔てる〕に広き場処出来たりとて大に喜びたり。然るに之より人望益減じて、此出火の原は王が付け火せしなりと謂ひ、又市中を徘徊する賊は帝の使命によりてなりと謂ふに至りて大に人望を失ひたり。之を以て何とかして人氣を修めざるべからずとて、此時耶蘇教徒を殺せり。

此事は後に話さんが、ユクタピアスの時耶蘇生れて処刑せられて後、其弟子諸方に非常の尽力を以て其靈法を説法して益此教を拡めたり。アツシリヤに行きしもの、小垂細垂に至りしもの、或は希臘に行きしものもありて、中にセント・ピーターなるもの、此羅馬に來りて之を説法したり。初めは実に微々たるものなりしが、併し此教は博愛仁を施すを以て主旨となす故に、其團結は堅固にして、此羅馬の腐敗せし社会中に立ちて現世の王国は此の如く汚敗極まるものとなれど吾教を信せば已來は実に天の王国に生れて人間の欲界を脱してゴツドの

本に至るべしと説きて、全く己れの情欲を制するにあり。此やり方たる、全く当時の羅馬と反対なり。故に一般都人に悪まれ、又ユード教にも悪まれ、従来よりのグリシヤ教にも悪まれて、公然之を説く能はず。故に夜密かに会して之が講話を聞き、或は土中に会堂を作れり。今日往々ローマ都□の土中の残存するカタコムは実に当時土中の会堂たりしなり。甚だ狭き室にして、其半分は全く墓地にて恰も隧道の如し。其穴の横に小さき穴を掘りて之にゴツド、ヤソ等の像を彫りて、此中に人を入れて横に之が覆ひをなせしなり。此少しく広き処に其信徒会したりしなり。之れ全く外部の教敵を恐れてなり。

而して此外部の抵抗力の為に其團結力は益固くなりて、此秘密の事は容易に漏れざりし。□□□□□〔空白〕を受けたものには之を伝へざりし。此くて益羅馬人の惡みを受けて、此信徒を殺すことを何とも思はざるに至れり。世にニーローの惡しきと謂ひて、此羅馬の大火は耶蘇教徒のなせし所となし、之を捕へて其体にチャンを塗り、之をニーローの御殿の前に立て、之を人ローソクと称して羅馬人を会して之に火を付けるを見せしめし。此の如く慘酷なる処刑をなして、此等の事は実に謂ふに及びざるものあり。之は却つて下等社会のもの甚だしく惡みたり。其上流社会の国体の□□□□□〔空白〕を知らざるものは大に喜びて信じたり。

当時外征少なくて、為に分捕品等少く、政府の収入甚だ少かりし。而して先きにカルギラの豪奢の為に大に其財資を湯費せられて、此に至りて亦大に驕るべき金なきに至れり。已むことを得ず豪族に向ひ、何か事に付けて其財産を没収したりき。之を以て不平等益起りたり。ニーローは大に之を恐れて、此先王より食事の時も兵を以て衛ら

せたりしが、此に至り益之を嚴重に衛らせたり。

併し、此の如き時代となり、此全国の腐敗するに至れば、何か之が反動を起さざるべからず。此時グリシヤに其文学を□□□□□□□□□□

〔空白〕時に諸処に内乱起れり。即、スパルタ、ゼルマンの大將其不平の為に歸りし時に会し、又イタリ〔イスパニアか〕軍隊の為に囲まれて遂に〔ニーローは〕夜或る処に逃れしが、其後遂に自殺したりしと云ふ。此れ正史に載するニーローの終りなるが、或る説に、ニーローを袋に入れて河中に投じて殺せしと。然れども此シーザルなる名を大に重んじて其死処に常に香華を供するものありしと。

此王よりシーザル家は絶へて、之より軍隊より撰出してローマ帝王となるに至れり。即、ニーローに反して起りたる諸將軍中、スパルタの大將なるガルバ来りて之が帝位に即けり。之は古き名家にして戦を良くしたりし。此帝より一人手にて政權と軍務とを兼ねる能はざるに至れり。此中独佚等より歸りし將軍はスパルタの將軍の帝となりしを聞き、己れも黙して止む能はず、之も亦帝とならんとし、同役の帝王二人あるに至りて、後に其シーザル家のもの帝たるべしとあり、始めて一人となれり。勿論、眞のシーザル家にあらざりしが、之が政權を取り、ピソソ〔?〕は軍隊のみを幸ふることとなれり。此時ガルバの失策は、兵士に金をやること少なりし故に、之より不平を起さしめ、為に亦外に權を争はんとするもの起るに至り、其下の大將其留守を窺ひ、之を遂に之を〔ママ〕して帝となれり。ソニー〔オットー〕之なり。之より北方にてはデスパツシヨン〔ヴェスパシアヌス〕、タイタス等の將軍起りて、之より羅馬は一の定りたる一帝國にあらずして、一方の内乱鎮まれば又他に氾濫を起して、実に將軍の権力争ひの

みとなり、撥乱反正極まりなき時代となれり。

此くて三百年の間、長く続きたる帝はなくして、皆五六年づゝに於て、而して羅馬全体の帝權を有する能はず、只一部の帝王たりしなり。中には間々名君もありしが、皆政權争奪の有様と知りて可なり。

只一段落となるは東西兩帝國に分れし時の事なり。此くなり行くは當時自然の大勢なりしにて、此大版圖を一人の手にて統御する、実に難事にして、殊に其中異種の人種を含み、西スパルタ〔イスパニアか〕、フランス、イタリ、□□□〔空白〕の人種、風俗、政度は東土耳其、小亜細亞、波斯の人種、風俗と異にして、ローマにて此等の遙か遠國を一に統御するなれば、自然之が二分となりて、之を守る大將に於ても勢其性質を異にせざるべからざるに至る。即、西的、東的政治、文物なかるべからず。此兩種の異なる風俗、政度より、互に之が軋轢を起こして遂に紀元二百八十年頃に至り、ダイラクリシヤンなる帝起りて、此帝は余程先見ありし人にて、此政權争奪を止むるは之を二分するに如かずとの考を起して、大將なるマクシミアン及今一段下の大將と評議して、此帝國を二分したり。即、ダイラクリシヤンは小亜細亞、シリヤ、埃及等を自分の領地となし、又、マクシミア〔ン〕はイタリ〔ママ〕、アツシリア等を取りて、之を其下に二人のシーザルを作れり。所謂副シーザルなり。大体は之を分ちて二となし、又之を二分したりしなり。西の副シーザルはスパルタ、フィンシヤ等の地を保てり。此ダイラクリシヤンは余程快活の人なりしが、己れの五十九歳の時、ローマは泰平となれり。故に此時隱居して退き、副帝マクシミアンを挙げて帝となさんとせり。又後に□□□□□〔空白〕を立て、帝位を亂し、此機に乗じて昔の帝國に覆さんとせり。此時面白き話あり

て、此に付て面白き話しありて(ママ)、□□□□□□がダイラクリシヤンを訪ひしとき、ダイラクリシヤンは後廷に出で、野菜を作れり。而して此時ローマ政治を行ふよりは此野菜を作る方余程面白しと答へしと謂ふ話しあり。此時コンスタンチンは西の副シーザルなりしが、時にフラン(ママ)に居りし。之が第二のジュリアスにして、此人が再びローマを統一して之を一人の手に掌握せんとして都をビザンシウムに移したり。(今のコンスタンチノブル)之よりローマは主府たる地位を失ひて他の諸都府と同格となりたり。之より諸都府に其権を分れて、爾来ローマに其北方より侵入せし蛮人を防ぐの軍隊なくなりて、遂に帝国は亡ぶるに至れり。之より中世史に属す。

岡倉先生口授 万国歴史

羅馬政治上の沿革は前述べし如く、其初区々たる都府なりしに、漸次生長して近隣の諸都府を其版図に入れ、進んでカルセージ、シリヤを合せ、欧州の覇権を握り、非常なる権力を得たりし。此の如く版図の拡張すると共に皆外の將軍漸く大となり、其権勢を争ひしが、漸次之が大となりて貴族党と平民党の争闘となり、平民党勝に帰して之が帝国となれり。即、ヤーガスタスの時にして、夫より三百年間の間、羅馬帝国なるもの続きて帝王之を支配せり。此間非常の弊害ありしが、結局ローマ歴大して一王の本に統御する能はず、ダイラクリシヤンに至りて之を二分して両帝国を立て、以てコンスタンチンに至り、即紀元三百三十年に至り、此ローマの首府を見捨て、当時ビザンシムなる所に移して、之をコンスタンチノブルと称したり。即、ローマが一時世界の首府たりしことは此紀元三百三十年迄にして、之より以後

は此コンスタンチンノブルを中心となすに至れり。故にローマは之より唯一州の都府たるに過ぎざるに至る。故にローマの歴史は此に至りて終りを告げたるにて、初め欧州の大勢は此ローマが長く首府たりし間は之が中心となりしが、此時より以後、欧(州)の大勢はフランシス(ママ)、ドイツ、□□□□の三つの間に決せらるゝに至る。即、此中心となるもの無くなりし故、是より各国区々の歴史となる。之を中世時代と謂ふ。此時代は此に一段落となれば、後に述べべし。東のローマ帝国の事も中世史に属して此後尚千年も続きしかど、其大勢に於て何の關係なし。故に合せて中世史上に話さん。

以前述べし所は之ローマ政治上の大略なり。之より宗教上の沿革の大略を述べんとす。ローマの宗教は大略三あり。即、第一期は伊太利に固有なる宗教にして、即、主として伊太利に以前より漸次発達し来りたる所謂エトラスカン宗教なり。第二期は即ローマが希臘の文化を受け、希臘と交通をなせし以来、南方伊太利、殊に伊太利の希臘殖民地の有せし宗教にして、所謂ギリシヤ教なり。第三期は即耶穌教にして、其差異明瞭なり。

第一期のエトラスカン教は如何なる性質のものなるや、十分明かならず。大に埃及辺のものと同類するとの説もありて、即、天地の自然を拝することを専らとする宗教なり。此エトラスカン教が入りてより羅馬にては後々までも此エトラスカの信ずる占の法残りて、必(畢)竟神の事に付て幼稚なる国民は常に此の如き事行はるゝものにて、之が一の慣習となりて、希臘教の行はるゝに至りても尚此エトラスカンの風を用ひて専ら獸を犠牲となして之を殺し、其腸を採りて其食物のある処を見て以て其吉凶禍福を占ひたりし。又、鳥を放ちて其飛び方によりて

之を占ひしこともあり。其詳細のエトラスカン教の事は分明ならず。

第二期のギリシヤ教は今日の希臘教とは大に性質を異にして、今日の希臘教なるものは所謂希臘の耶穌教にして、今話す所は古の希臘教なり。希臘教はローマの東西両帝国となりてより此教も二つに分れ、東のコンスタンティンにあるものとローマに行はれしものと之なり。此コンスタンティンに行はれしものはギリシヤ在来のものにて、即、ギリシヤ的の耶穌教にて、今露国に行はるゝニコライは之と同主義のものなり。此第二期に行はれしものは所謂希臘半島にて始まりしものにてギリシヤ的なり。此中にも幾分かの差異ありて、ローマ人の信ぜしものは悉く希臘人の信ずるものと同じからず。ギリシヤ人の始めしものは始め地中海北岸の殖民地メジシア〔ママ〕人の広げし一の宗教の固まりて、其極、初め亜細亜の岸より伊太利に渡りしものも、又後に希臘に渡りしものも同教なり。尤進歩せしものは此希臘半島にて漸次発達せしものにて、而して其初ローマの未だ勃興せざるに当り、ローマ人其ものも希臘人と同主義のものを有したりし。之に加ふるにギリシヤと交通往来せしより後も此熟せしギリシヤ教を合せたりし。即、此希臘教に二種ありて、一は在来ラテン人が持ち来りしものと、又ギリシヤに生殖せし教と之なり。此故に、単にギリシヤ教と称してもローマに於けるギリシヤ教とギリシヤ人其者の宗教とは赴きを異にす(幾等か)。故に神の名の如きも皆異なり。併し其ローマの某神はギリシヤの某神に当ると称するものは其性質に於て大に似る処ありて、文学の盛なるに従、其神の性質は益類似するに至れり。主としてローマ人は Júpiter を拝したり。是れ希臘のズユース神に当り、又ジュノウなる神あり、又ギリシヤのヒラと称する神と同じく、其他大体に於

て似る処ありて、ギリシヤの Poseidon は羅馬にてネプチユンと似たり。併し幾らか其氣質を異にせり。又羅馬人はマールス軍神及火の神、音楽の神を拝崇せし。之れ羅馬にては尚武心を興せし故、羅馬にては殊に此マールスを拝せし。而してギリシヤにてはアポローはやまじきものなれど、ローマにては行はれざりし。此く崇拜する神の性質は異ならざりし。大体一の系統に属するを以てギリシヤ教の範圍を出でず。人智の開くるに従ひ、此等の神も只一の神として、之が人に恵と罪〔罰か〕とを与ふるのみものとなすに至らず。併し、愚民に於ては然りしが、上流社会に於ては之を自然の力を代表したるものとし、或は人間の志想を代表したるものとなし、種々深き理屈を附けて之を拝せし。

此ローマ人は一般〔に〕實際好きの人間にて、徒らに空理に走せ空想を弄ぶを惡みて他の人民の如く幽玄なる考をなさざりし。故に此□□〔空白〕に□□□□〔空白〕なく、道德の主義は支那の道德学の主義と同じき性質を有し、重に此ローマにてはギリキのストイツク派が行はれし。之はギリシヤのジノウ〔ゼノン〕が主張せし。之より続々此説をなすもの出で、之を拡張せし。之は大に進歩せしものにして、己れの情欲を制するを以て最上の恵みを得るものとせし。天地の如何に転倒するあるも自若として動かず、実に巖然たることを装いたるものにて、眞の道を得て死したるときは靈魂は古の豪傑と共に遊ぶを得るとせり。故に地獄極楽の考はなかりし。天道の日の光りある所に行くとの考は耶穌教の考と同じ。此前の耶穌教の考は暗処に行くことせしが、此英雄の行く処は世に生きたる中程の楽なれど、此所に行けば神とならぬ以上は□□□□〔空白〕に迷ふなれど、英雄と共に群

に入るを得ん。併し心賤しきものは一の下等の中に入るものなりと。故に人間は自分の性質により、死後分類さるゝ者とせり。耶蘇の説にては自殺は人を殺すと同罪とせり。此宗教に於ては自殺大に行はれて、さしちがへて死し、或は剣を立て、此上に乗りにて死することをなせり。我帝国の自殺術の如く精密ならず。此風は我国独特の所たり。

此ローマ人も大に恥を重んじ、其死に方に就て大にやかましく謂へり。之れ全くギリシヤ教の影響なり。併、此教の後の羅馬の世界に行はれし所にては、殆んど無宗教の力を教へ込みて、一方にては土民之を信じ、一方にては学者理屈を付けて信ぜり。大抵ローマの主となりたるものは殆んど無宗教の有様にて、如何なる酷き事もなして其死後の事は少しも意に介せず、其生存中に無上の樂をせんとせり。之を救済せん為に起りしは第三期の耶蘇教なり。

此耶蘇教の事は非常に込み入りて一朝一夕に話す能はず。而して此宗教の事件は余程種々の（ホメル）を持つものにて、耶蘇は正しきとか或は不正なるとか、如何にても論ずるを得るが、今は只歴史に現はれし耶蘇教の概略を述べべし。

耶蘇はユダ国より出でたり。ユヂヤ人はセミチック人種にして、実に不思議なるは、此セミチック人種が世界の宗教の中の重大なるもの三を出せり。即ち第一にはユダ教、第二には耶蘇教、第三にはモハメット教之なり。以上のものの中、此尤末の回々教は後、垂刺比亜に移りたり。而して前のユダ教と耶蘇教とはユダ国より□□□□〔空白〕には入れり。メジシヤ〔シリアか〕に隣れる小国なり。而して忽ち四方に伝へて信奉するに至れり。此教の文明の発達上に及ぼせし功力は実に莫大なり。此ユダ国は亡びたれど、人民は世界の北

方に尚散漫して、当時世界の富は此ユダ人の手にあり。此ユダ人は種々の艱難に遭ふも其堪忍力強くして、殊に中世期中には金貨しをなして恰も銀行の如くなりし。之を欧州人に謂はるときは、甚だ賤しき者とすれど、其実力に於ては実に大なり。而して此人種中より耶蘇生れたるなり。前の三つの宗教共一神教にして、他の一切、宇宙を拝する所謂万象を神とするにて、一神教に似る所ありて万有宗教とも謂ふが、他には多神教なるものありて、此一神教の点より謂へば実に此セミチック其濫觴たり。而し、此ユダ教の起りし源因は前謂ふ如くカルセジ、アツシリヤにありて、ユダ教の主として謂ふ所は、一の神ありて之がユダ人を保護する神にして、即アブラハムなり。之が真の神にして、此神の威権によりて他の神も亡ぶなりと謂へり。大に之を信じて、此心持を伝えるは即之を伝ふべきものなかるべからず、所謂預言者なるものなかるべからず。故に非常の太平起りて救世主其間に出るべしとのことを此ユダ教にて唱へたり。即、千八百九十六年前にて、此誕生日に就ても大に考古学上やかまし。之が生長するに従ひ、聰明穎悟にして、此生まるゝ仕方にも、実に賤の家に生れて、之が長じて種々の教を聞き、後にセントジョンより教を受けて、人を濟度せり。自ら称する様、天下を一変する時来れり。即ち天が我を地に降して□□□□□□〔空白〕と謂へり。此時の耶蘇の教に就ては、此時耶蘇の謂ひしことと今日の耶蘇教に説く処とは大に異なりて、中世は殊に異なりて、耶蘇の伝も大体変ずるに至れり。之は宗教の問題にて、殊に不思議なることありて比評すべからざることあり。つまり、神の子にして、即、神のやどりしなり。之が不思議を現はして火を渡り、又天に上り、或は病をなほしたりして神通を現はせし。釈伽

の生れしと同じ有様なり。此かる事は先づ何でも宜しきが、此教に説く所は己れを脩むるにて、ゴツドは心にあり、身を捨て、慈善を行へば天下□□になりて心は王国なり。即、己れを捨て、仁をなすと謂ふ主義なり。所が此時のローマの弊政を見て大に激せしこともあり。又ユダ教を打ちし故、ユダ人の為に悪まれて、或は内乱を企つるものなりとして、パインツト〔ピラトか〕の裁判官の前に連れて行かれ、汝は一の王国の王なり。故に冠を与へんとていはらの冠をのせて、遂にはりつけの刑に〔を〕行ひし。此時此はりつけの柱を耶蘇に負はしめ、カリバリ〔ゴルゴダ〕の山にて刑に処したり。而し其両方には盜賊を同じ刑にして、此中央に耶蘇を置けり。即、慈善の為に身を天に捧ぐるとせり。人間と考ふれば実に立派なる仕方なり。後之を降して棺に入れしが、三日目に体は消え失せたり。之より其弟子は此不思議に至る所に説き回りし。之より大に広まりて、之を滅せんとせしも、之が種々の処に伝りて、耶蘇教を信するものと之を信ぜざるものとの間に軋轢を生じて、ニーロー帝の如きは殊に惨酷なることをなして、此信者を擒へて火刑にしたりしが如き其一例なり。然れどもローマにて之を信するものは道德堅固にして団結強く、且節儉にして、極めて良き民なりし。然れども当時尚公然之を信する能はず、地方にては稍公然と行はれしが、ローマ府にては此信者は公然と信する能はざりし。

此耶蘇の此く世界に行はるゝに至りしは非常の関係ありて、之が第一の源因は軍隊に之が移りて今のゴールに伝はりて、之を信する軍隊は非常に強くして、一方は此死後ゴツドの側に行きて金色の□□□□□□〔空白〕に生れ、若し之が悪事をなさば底なき穴に落ちて所謂地獄

に落つと。此く未来に就て恐れしめし。此を信する兵士は道德堅固に且強かりし。〔文章欠落か〕之を統一するに当り、ダイラクリシヤンは国を二分したり。又之を二〔分〕して四道に分ちし。西の帝国の別のシーザル家なるコンスタンタインは専ら耶蘇信者を用ひたり。コンスタンチンが世界を手に入れて後、此コンスタンチンに帰り、ミラ〔ミラノ〕にて之より耶蘇教を公行せしめたり。之れ耶蘇信者の兵士の為に世界を得し故、此くはせしなり。而して此コンスタンタインを立て、後、護衛士も皆此信者にして、此王は政略家にして、公然と此耶蘇教を許せしかど、自分は旧来のユダ教を信じて耶蘇教を好まざりし。耶蘇にては此王によりて始めて公行を許されし故、神の如く云へど、全く王の政略より出でしなり。

耶蘇の公然許されしときは中世史の終り〔ママ〕にて、耶蘇紀元三百十三年なり。此時日曜日は休むこととせり。故に耶蘇教の兵士は軍隊を離れて神を拝して宜しとせり。故にコンスタンタインは一方に機嫌を取りて□□□□〔空白〕の別当となれり。然れども死後グリーキの式を以てせり。此くは自分は信ぜざりしを知るべし。之れローマの終りに於ける耶蘇教の大略なり。

岡倉先生

終り

明治廿九年四月廿二日 中澤澄男先生口授 万国歴史 中世史
〔以下省略〕

〔よしだ ちずこ／東京芸術大学美術学部非常勤講師〕